

## 「中学生のもつ『場』における意欲」研究 の全体構想

本研究は、上記のテーマに基づき、3人の研究者がそれぞれの視点からアプローチをした。

### テーマ設定の背景

中学校は様々な変革を求められている。間近にせまった学校完全週5日制の実施や学習指導要領の改訂、個性重視の指導への移行など、指導内容の質的見直しが必要となっている。

また、学歴信仰が崩れつつある現在、「高校入試」のハードルだけでは学習の動機づけにならなくなることが予想され、それに代わる新しい動機づけが必要になってくる。

さらに、「中学生」という時期は、周囲の人間関係が拡大し、自分以外の「他者」から受ける影響も大きくなる。学習活動を含めた彼らの行動は、「他者」との関係性の中で生み出され、その中で、意欲も形成されると考えられる。

このような状況下、中学校は「学校」という集団指導を前提とした枠組みの中で、中学生一人ひとりが個性を発揮し、意欲的に活動できる環境をいかにつくることが問われている。

#### \*「場」の定義

「場」は、日本人が非常によく使う言葉であるが、その意味は幅広く解釈も様々である。本研究も詳細な定義づけは行っていないが、「人」と「人」との関係性があり、そこから様々な情報が生まれる場所を「場」と捉えている。(例えば「教室」は教師と生徒、生徒同士の関係で構成されている「場」である。)

### 目的

以上を踏まえ、中学生にとっての新しい「意欲」のモデル抽出にあたり、今回は、他者との「関係性」＝「場」によって形成される意欲に着目した。中学生が関わる他者(クラスメート、友人、教師、家族、大人、地域の人)との関係性を探っていくことで、新しい意欲のモデルが抽出できるのではないかと考えた。

この研究をとおして、集団や環境のなかでの人との関わりが、中学生の意欲と行動にどう関係しているのかを把握し、個人の意欲が促進され、個人の総体である「集団」としても価値を生み出すような『場』がどのようなものなのかを探りたい。

## 刊行にあたって

わたくしどもベネッセ教育研究所は、1980年に設立されて以来、子どもや教師の意識・実態調査、教材研究、教育動向分析などを行ってまいりました。

その調査・研究成果の一部を、小・中・高等学校へむけた子ども実態調査報告書「モノグラフ」、中学教師を対象とした教育情報誌「進研ニュース(中学版)」などの発刊物や、講演会、シンポジウムなどを通して、教育関係者の方々に広くお届けしております。

さて、今回発刊いたしました研究報告書は、中学生にかかわる様々な「場」における「意欲」形成の問題に焦点をあてました。中学生は、その生活時間の大半を占める学校という「場」や、家庭、地域といった様々な「場」とかかわりをもって生活していますが、それぞれの「場」がもつ意味や機能も時代や環境の変化に応じて変質していきます。

今回の研究では、学歴信仰が薄れ、「学習」に対する意欲も変化し、学校の「場」がもつ意味も変化が予想される中で、彼らが今、どのようにしてよく生きるための「意欲」を形成し、中学生生活を有意義に送ろうとしているのか、また、どのような環境や条件が必要なのかをあらためて捉え直したいと考えました。

今後の中学生の生活環境のあり方についての検討に本研究結果が少しでも貢献できれば幸いです。

今回の報告内容は、3つの研究で構成されています。研究1は「授業」の場における子どもの学習意欲研究。研究2は授業以外の「インフォーマルな場」における仲間づくりを中心とした意欲の研究。研究3は「場」における動機づけのメカニズムの社会的な研究。報告書は3研究をまとめたダイジェスト版1冊と、各研究の報告書3冊で合計4冊です。研究にあたりましては、研究1を国立教育研究所の奈須正裕先生に、研究2を東京学芸大学助教授で精神科医の田村毅先生に、研究3をライズコーポレーションの岩間夏樹先生にご協力をお願いしました。

なお、末筆ながら、調査にご協力いただきました諸先生方、生徒及びそのご家族の皆様にも厚く御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

ベネッセ教育研究所  
代表 島内行夫